

話したくなるとき

渡邊 満美

小学校の健康診断に向かう。

どんな子どもとどんな出会いをするだろう……。

ほんの数分の出会い。しかし、ここで話すことが子どもたちにどんな影響があるのだろうか……と思うと

「気を引き締めて！」と自分に言い聞かせ幼稚園を出た。

私が小学校へ向かい、今から出会う子どもたちは

健康診断の中に組み込まれている『健康相談』という時間に養護教諭として出会う子どもたち。この『健康相談』という時間は、健康診断の振り返りを子ども一人ひとりと先生で一緒に行う時間。小学校では六年生がこの『健康相談』の対象となつている。学校に通うことのできる健康な子どもたちであるため、大病を抱えている子どもはほとんどいない。とくべつ異常のない子どもたち。しかし、そん

な子どもたちも、この数年で背が大きくなったり、体重が増えたりと成長をしている。五センチメートルも背が伸びたこと、去年と比べ歯を治療して虫歯がなくなったこと、この六年ずっと虫歯がなく生活していること、など……。ほんのちよつとしたことだが、ほめられることを喜ばない子どもはいない。そのことを伝えるだけで嬉しい表情をする。健康であることをあたりまえなものではなく、喜んでいいこと、自分の努力も入っていることなどを伝える。この時間は、ほんのちよつと自分の健康・生活を振り返る時間。

子どもたちは健康診断の結果と一枚のシートをもち、それぞれの先生の所に行く。このシートにはいくつか質問が書かれている。健康診断を振り返ると書き込むことができる。小学校では歯科のことを中心に質問が書かれている。その質問項目の中に「こころのじょうたいは？」という項目がある。それは

心身ともに健康かを振り返る質問でもあり、自分のこころの状態を自分で振り返る。

もうほとんどの子どもが終わり、待っている子どもたちがそれぞれの列に数人になってきた。私もちよつと疲れてきていた。

男の子の集団（五、六人）が私の列に並んでいた。並んでいたと言うより団子になっていた。その集団のひとりが順番になり、私の前に座った。すると子どもたちが団子状態のまま椅子ごと近寄ってきた。私も疲れていたのだが、待っていることに子どもたちも疲れたのだろう。私がおの子どもと話しているのを後ろで聞いている。歯肉の腫れの話し、汚れの話を一緒になつて聞いていた。プライバシーのことも気になりながら前に座っている子どもも、後ろの子どもも興味深く聞く様子からこのまま続けてしまった。次の子どもの番に後ろに下がるよう伝え

た。しかし、いつの間にか一緒に聞いていた。近づいた。しかし、私は後ろに下がるように伝えた。しかし、四人目の子どもの番も同じ状態で続いた。「こころのじょうたいは？」という欄に(△)印がついていた。

「さんかくね。なにか気になることあったかな」

と聞くと頷いた。しかし、後ろを振りかえって残りの友達を見て、言葉がでないようだった。すると女の子は、

「だいじょうぶ」

その言葉で話を切られてしまった。私は後ろ髪を引かれる思いで次の子どもと出会った。終了後、小学校の養護の先生に伝えた。すると「担任と一緒に健康相談の場にいるから伝えてあげて」と。そこで、少しその時の状態を話した。すると担任は、

「なにか抱えているのは感じていたんです。でも見えていなくて……」

そして、続けた。

「でも、良かった。少し見えました。本人はこの場で、私が相談しているのも分かっていて。しかし、私のところには並ばない。そして小学校の養護の先生のところにも。それって他の

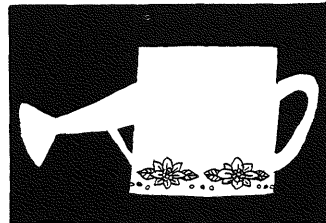
誰かがいいのかも。そういう人になら言いたかったのかもしれない。話したいという気持ちはあったみたい。少し声をかけてみようかな」

私は申し訳ない気持ちでいっばいだった。

「私がもう少し、まわりの子どもものことも気にしていたら……。よろしくお願いします」

と言って幼稚園に戻った。

私がある場で聞くことができても、何か変わるも



のでも、できるものでもない。ただ、話そうと思つたかもしれない思いを私がこわしてしまった。大切なことは、このことをまわりの大人が知って繋げておくことだとは思ふ。これからの生活に関わる小学校の先生が知っていることが大切だと。しかし、その子にとってはたった一つの伝えるチャンスで、伝えたいタイミングだったのかもしれない。ほんの少しの出会いを甘く見ていたのは私だったことに気がかされてしまった。

その後、中学校・高校の健康相談へと出向いた。ほんの数分の出会いだが、そのとき・その子の声を聞くように「氣を引き締めて！」と自分に言い聞かせた。

*

H子が保健室の入口からずっと私をみて、私を見たまま近くのソファアまでやってきた。私もH子が

ら目をそらすことができなかつた。H子の目からは、今にも大粒の涙が出そうにみえた。

「ショックなことがあったの」

私に向かつて話しはじめた。私の前で一緒に聞いていたY子が、

「どうしたの」とH子に近寄つた。入ってきた様子をみて、私は少し近くに寄ろうと思つた。しかし、私の手前のソファアで座り、私の近くに寄らないH子から私を近くに寄せたくないというものを感じていた。しかし、H子の「ショックなことがあったの」という言葉。寄せたくないというより、頑張っているという感じだったのであろう。しかし、H子の言葉で近寄つたY子。私はそのY子とH子のやりとりを見守りたいと思つた。ここでふたりは何かを感じるだろうと何となく思つた（その何かは分からなかつた）。その思いは私の動きに反映したようだ。いつもの私だったらH子の様子を見てすぐ近寄つて

いただろう。しかし、Y子の言った言葉・行動によつて私はその場を動かずにいた。そしてY子はもう一度

「どうしたの」

H子は「ちょっと耳を寄せて」

Y子が耳を寄せるとH子はすぐさまこちらを見て

「まみ先生には言わない」

私の動きを感じたのではないだろうか。私がH子だけに気持ちよさを寄せていないことを……。H子をまるごと受けとめるのではなく、H子が友だちとどう乗り越えるかを支えたいと思った私の思いを。H子の言葉に私は何もこたえず、私は耳を寄せたY子とH子のやりとりを見ていた。

「……（何か言っている）」

遠くて聞こえなかった。聞こえない距離ではないが、意識的に聞くこともやめていた。Y子から何の反応もなかった。Y子は聞こえなかったのだろうか

……。何の反応もないY子に私はちょっととまどつた。ここでY子に「なんて言つた」と聞くべきか、それともH子に「先生にも教えて」と言うべきか……。私はどちらの言葉も言わないがH子に顔を近づけた。

「言わない」

しかし、先ほどの言い方とは違って「聞いてもいいよ」という声が聞こえたような気がした。そしてまたY子の耳の近くで言う。さつきより少し大きな声で。しかもH子はこちらを向いて話していた。それでも、私にははっきり聞こえなかった。Y子には聞こえたはず……。反応がなかった。なぜ、Y子は何も言わないのだろうか……。私は自分がH子に声をかけることを迷っていた。Y子とのやりとりの中でH子がつらかったことをY子に分かつてもらえる方がいい。これからつらかったことを友だちに伝えることも出来るという経験のためにもこの関係を大切に

したいと考えていた。でもあまりにも反応のないY子の様子、今日のH子の様子から、これ以上ふたりだけにしておいてはいけないと思った。私はさらに顔を近づけて、

「な〜に」

今度は、言葉で拒まなかったが一瞬身をひく態度をとった。しかし、表情は少し笑って（嬉しそうに）見えた。Y子の耳のそばでH子が話しはじめた。私が顔を近づけるとH子も近づいてきて、声もよく聞こえた。

「私も棒であそぶのやりたかったの」

そこでH子の顔を見るともう涙がこぼれていた。我慢しているのがよく分かった。しかし、すぐに涙をとめていた。気持ちがあふれてしまい流した涙を自分でとめていた……。

「もう少し（もうお帰りのお片づけの時間だった）、あそびたかったのね」

と言葉をくり返し、H子を見た。すると、H子の横に移動したY子が、

「砂場で私がやっていたの？（棒たおしのような動きをして言った）」

H子は「そう」とこたえた。

いつのまにか、Y子の姿はなくなっていた。ちよつとするとH子が、

「私ねシヨックなことがあると保健室に来るの」

「そうだったのね」と私はこたえた。

少し間をおいて、H子に、

「私もシヨックなことがあったらH子ちゃんのところに行ってもいい」と聞くと、

「だ〜め、先生は池のくみに行くの」

H子の照れ隠しだったようにも思えた（そう私が思いたかったのかもしれない）。でも、H子の顔が晴れ晴れしているのは確かだった。少しは気持ちの立て直しが出来たのではないだろうか。そんなやりと

りの後、お帰りだという声が廊下の方からも響いてきた。

「さあ、お部屋に戻ろうか」

H子は入ってきた時とは違う表情で部屋に戻った。

ふたりの関わりの中で私は待ちきれずに、自分でも話し、分かってほしいし、何か言ってほしいのは……と思っていた。Y子が何もこたえずにいることが、耐えられないのではないだろうか……と考えていた。しかし、私がしたことはY子とかわらないことのような気がした。

H子との関わりのなかでY子の気持ちも気になっていた。Y子がH子に何も言わなかった理由を考えていた。Y子はH子がもう少し遊びたかったことに気づき、その遊びを自分はやってきっていた。しかし、H子は出来なくてそれをやりたかったといっ

悲しんでいる。そのことを受けとめていたからY子は「そうだったんだ」ということも「私はやった」ということもできずにいて、何の反応も言葉も出なかったのかもしれない。そして、いつの間にかその場から姿を消していた。本当はそんなY子こそ、受けとめ関わりなくてはいけなかったのかもしれない。

*

幼稚園の養護教諭になって、「保健室にはどんな子どもたちが来るの?」といつも聞かれる。子どもたちと生活している私にとって、どんな校種でも保健室に来る子どもはそんなに大きく変わらないと思える。もちろん持ち込んでくる内容に大きな差はあるかもしれない。しかし、子どもになってみれば経験の差が違うのだから、今の子にとっては抱えている大きさは同じなのだと感じている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)